

琉球大学学術リポジトリ

商業高校生の進路発達とCAMIによる生きる力の発達に関する研究：普通科高校生との比較を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 高江洲, 譲治, 中尾, 達馬, Shimabukuro, Tsuneo, Takaesu, Joji, Nakao, Tatsuma メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35566

商業高校生の進路発達とCAMIによる生きる力の発達に関する研究

～普通科高校生との比較を通して～

島袋恒男^{*}，高江洲譲治^{**}，中尾達馬^{*}

A psychological study on the career development and development of “Zest of living” in commercial high school students

Tsuneo Shimabukuro^{*}，Joji Takaesu^{**}，Tatsuma Nakao^{*}

I. 背景と目的

1. 進路指導の難しさ

高校における進路指導の難しさについて9割以上の学校が、進路指導を「難しい」と回答しており、進路指導がより難しくなっている状況がうかがえる(リクルート, 2010)。その指導の困難さをもたらしている要因として、多くの学校が生徒の「進路選択・決定能力の不足」をあげている。高校での進路指導は「進路決定の指導」や「出口指導」が中心となりやすく、生徒自身も「とりあえず」進路先を決めて合格や内定を獲得することに執着してしまうことがある。このことが、早期離職や大学・専修学校中退へとつながると考えられ、児童生徒の勤労観、職業観を身に付け、自らの進路を選択・決定する力(生きる力)を育てる必要があるとして、1999年以降、小学校の段階から勤労観、職業観の育成を図る目的として、キャリア教育が注目されてきた。

2. キャリア教育推進の背景

キャリア教育が必要となった背景には、情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化や少子高齢化などの社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化が進み、非正規社員の増加や終身雇用制度の慣行も無くなるといった就職や職業をめぐる環境が変化しており、子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見つげにく

く、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっていることがある。

そのような環境の変化は、子どもたちの発達に影響を与え始めており、中でも特に若年層における社会人・職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れや、その背景にある精神的・社会的な自立の遅れが問題視されてきている。

子どもたちは、人間関係を上手く築けず、自分で意志決定が出来ない、自己肯定感が持てずに将来に希望が持てない、進路意識や目的意識が希薄なまま進学し、就職しても長続きしないなど、生活や意識が大きく変化していることが大きな問題になってきている。

これが長じて若者の中にもモラトリアム(自分探し)の傾向が強くなり、「フリーター」や学校教育も受けず職にすら就かない「ニート」、新卒者の早期離職を表す現象「七五三現象」などが発生・増加したといわれている。

3. キャリア教育の実態

本県でも国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)の提示した4能力領域の構造(人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意志決定能力)をもとに「沖縄県キャリア教育推進プラン」を作成し、実践している。

その中で小学校の職場見学、中学校での職場体験、高等学校でのインターンシップの取り組みがあり、実施率は、小学校職場見学は63%、中学校の職場体験、高等学校のインターンシップは

^{*} 学校教育講座

^{**} 那覇商業高等学校

100%の実施率となっている(沖縄県キャリア教育推進プラン2006)。「職場体験・インターンシップに関する調査研究」(国立教育政策研究所生徒指導研究センター2007)によれば、職場体験の成果として最も多く挙げられたのは『『職業観・勤労観』が芽生え、職業や働くことへの関心が高まってきた』で、95.7%の中学校が「そう思う」あるいは「ややそう思う」と回答している。これに、「夢や希望を持ち、自己の将来や生き方を考えられるようになってきた(82.5%)」と続き、一定の効果が期待できるとしている。しかし、本県の新規学卒者(高校生)の進路決定率はいまだに最下位であり、無業者率も全国ワースト1位であると指摘され、また、就労3年目までに50%強の離職率があり、特に1年目に離職する割合が全国と比べても高いといわれている。このような進路状況から、本県の高校生の「進路選択・決定能力の不足」はもっと高い可能性があり、学校で実際に行われているキャリア教育は生徒のキャリア発達に十分に繋がっていない可能性がある。

4. 「キャリア教育」における「生きる力」

『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』(文科省、2004)のp1「はじめに」には、「生きる力」について書かれているところがある。

『今日、少子高齢社会の到来、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化等を背景として、将来への不透明さが増幅するとともに、就職・進学を問わず子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。こうした中、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面する様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにする教育の推進が強く求められている。一方、これまでの学校教育の在り方については、学校における取組がともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になる傾向があったのではないかと、あるいは、子どもたちが社会人・職業人として基礎的・基本的な資質・能力

を身に付けるための取組が十分展開されてこなかったのではないかと、さらには、自らの生き方を探求したり主体的に進路を選択決定したりできるようにするための取り組みが十分に機能していないのではないかとといった懸念が、各方面から繰り返し指摘されてきたところである。人材育成が日本の根幹を支えるものであるということ踏まえ、教育が何をなさねばならないかを考えるとき、改めて「キャリア教育」の視点から我が国の教育の在り方を見直す必要がある。それは、今、まさに求められている、子どもたちの「生きる力」をはぐくむ教育を推進していくことに他ならない。本協力者会議のテーマである「キャリア教育の推進」のねらいとするところは、大きくはこのような課題を克服していくことにある。』

つまり、キャリア教育で育むべきものは、生徒の「生きる力」だといえる。

5. 「生きる力」と原因帰属

中央教育審議会(答申)によれば、「生きる力」を「確かな学力、豊かな人間性、健康・体力のバランスのとれた力」とし、3つのレベルで説明している。

「確かな学力」：基礎的な知識・技能を修得し、それらを活用して自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力。

「豊かな人間性」：自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

「健康・体力」：たくましく生きるための健康や体力

この「生きる力」は、教師による教授はあるものの、生徒自身が学習活動や他者との関わりの中で成功や失敗といった経験から学び、積み上げられていくものだと考えられる。しかし、成功や失敗の原因帰属の捉え方によって子ども達のその後の行動や動機づけに大きく影響を及ぼすのではないだろうか。この生徒の原因帰属の行われ方について説明する理論としてCAMI理論を紹介する。

6. CAMI理論

Skinnerら(1988a)によって開発されたCAMI理論によれば、人が目的を達成するための行動には、「行為者」「目標」「手段」の3側面が含まれていると考え、行動の予測には行為者と目標の関係(統制感: Control beliefs)、行為者と手段の関係(手段保有感: Agency beliefs)、手段と目標の関係(手段の認識: Means-ends Beliefs)の3つの側面を理解することの重要性を指摘した。このようにCAMI理論とは、自己の目的達成に関する目的達成への自信や無力感と関係する「統制感(Control beliefs)」, この統制感の支えとなっている目標達成に向けて自分にどれだけの手段(努力, 能力, 運, 他者の援助)が備わっているのかという側面である「手段の保有感(Agency beliefs)」があり、目標を達成するためにはどのような手段(努力, 能力, 運, 他者の援助, 未知の原因)があるのかという一般的認知である「手段の認識(Means-ends Beliefs)」の3側面にInterviewのIを加えた略称である。CAMI測定尺度では、自分がある目標を達成することができるという自信・確信を「自己統制感」で見ることができ、そのための手段をどれだけ保有しているかを「手段の保有感」で見ることができる。

7. CAMI理論と「生きる力」の関連

「生きる力」と原因帰属の関係を明らかにするために、千葉(2009)は「新しい学力を育む」研究会により作成された「生きる力」の4領域(①「能力・スキル」領域, ②「社会への適応力」領域, ③「態度・価値観」領域, ④「自己成長力」領域)と学習, 進路, 対人関係の3つのCAMI測定尺度との相関により、一部分ではあるが、中学生の「生きる力」の現状を検討している。

千葉(2009)によれば、生きる力の4領域と学習, 対人関係, 進路の3つのCAMIは、「運の保有感」との関連は浅く、「達成への統制感」「能力の保有感」「努力の保有感」「他者の援助の保有感」で「生きる力」と最もつながっていたといえ、CAMIにて「生きる力」を予測できると述べている。研究結果をまとめると、将来の夢を持ち、生活習慣への意識が高く、家庭学習時間も比較的長い生徒ほど、「努力の保有感」が高く、

生きる力へも学力へも好影響を与えているが、「運の保有感」の高い生徒は、生きる力へも学力へも好影響を与えていなかったとしている。

8. 高校における「キャリア教育」

商業高校の教育は、働くことや職業について直接学ぶ科目が多く、商業の授業, 外部講師等を招聘しての進路学習等によって勤労観を培い、職業の理解を深めており、学校で学んだことを、実際にインターンシップや企業訪問, 職場見学によって計画的に体験させ、さらにその後の授業で働くことの意義や職業についての理解を深めることで勤労観・職業観を育成できると考えられている。さらに、平成21年に改定された高等学校学習指導要領においては、各教科において、商業分野の基礎的・基本的な知識・技能を定着させる観点から科目構成の見直しや内容の改善が行われた。各学校においては、学習指導要領改定の趣旨を踏まえ、各教科・科目においていわゆる座学と実験・実習の有機的な連携を図り、基礎的・基本的な知識・技能の一層の定着を図るとともに、「課題研究」等の実践を通して、問題解決能力や自発的・創造的な学習態度の育成の充実に努めているとある。一方、普通高校では、「総合学習の時間」を中心にキャリア教育を行ってきたが、その一環として普通科の約67%が家庭, 商業といった教科を中心に何らかの職業科目を設定している。しかし、履修については、生徒の選択に任されているためか、必ずしも職業や自らの生活や将来を考えると結びついておらず、普通科の生徒で将来の職業を意識している者が商業学科と比べて少ないという調査結果等にも伺える(中央教育審議会答申, 2010)。

一般的には、キャリア教育の範疇である職業教育が功を奏し、商業高校生の方が就職に関しては進路成熟しているように思える。しかし、商業高校への入学者には、商業教育に興味関心の高い積極的な生徒も多いが、自分の偏差値に合う学校として入学した、商業教育に興味関心の低い生徒も存在する。このような目的意識に差がある生徒達に画一的なキャリア教育を行ったとして、はたして進路成熟に結びついているのだろうか。

千葉(2009)によれば、「他者の援助」が感じられる生徒ほど、普通科高校へ進学を希望し、「他者

の援助」を感じられない生徒ほど、商業高校や就職を選ぶ傾向を明らかにしており、商業高校生の「生きる力」が育まれていない可能性を示唆している。千葉(2009)の研究を踏まえ、商業高校生と普通高校生の原因帰属を比較する必要がある。

9. 進路成熟態度尺度(CAMS-4)

進路成熟の程度を測る尺度はいくつかあるが、その1つである坂柳・竹内(1986)の「進路成熟態度尺度」がある。坂柳ら(1986)は、進路指導の目標の1つである進路発達・進路成熟の促進を図る前提として、進路成熟度を測定する尺度が必要であること、進路指導を進める上でこの尺度が不可欠であることから、1981年より進路成熟態度尺度(Career Maturity Attitude Scale: 略称CMAS)の作成に取り組んできており、4度にわたる改訂からCMAS-4として最終的な信頼性と妥当性を得ている。この進路成熟態度尺度(CMAS-4)は、進学に対する進路成熟態度を見る「教育的進路成熟(ECM)」と職業に対する進路成熟態度(OCM)の2つの側面から構成されていて、さらに各側面を3つの分野からみる「進路自律度(CA)」「進路計画度(CP)」「進路関心度(CC)」といった6つの下位尺度から構成されている。

本研究の商業高校生との比較対象校として進学率の高い普通科高校生を調査対象としている。進学率が高いということは、大学進学に向けて十分な進路指導が行われており、教育的進路成熟態度は商業高校生に比べて発達していることが予想される。しかし、商業高校生は職業教育を受けているため、職業的進路成熟は商業高校生のほうが発達しているというのが一般的ではないだろうか。

10. 本研究の目的

近年、若年者の失業率の高さや、フリーター等非正規雇用の増加、若年無業者数、新規学卒者の早期離職など、「学校から社会・職業への移行や社会人・職業人としての自立」が、社会構造的な課題となっており、学校から、社会・職業への円滑な移行を促すために、キャリア教育と同時に、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる」ための“職業教育”も必要とされている。「今後の学校におけ

るキャリア教育・職業教育の在り方(答申)」によれば、普通高校のキャリア教育において、より具体的な職業との関連を意識した学習を通じたキャリア教育の実践になることを十分に考慮し、各学校において、職業科目の教育課程上の位置づけや履修指導方法等の見直しを図りつつ、その機会を確保していくことが必要と記されている。商業高校における就職を念頭においた進路指導や職業教育としての商業性を高める授業は、今後、普通高校のキャリア教育の推進への模範となりうる可能性がある。しかし、商業教育に携わる教師は、職業教育がキャリア教育の内容を含んでいて、普通高校生よりも進路成熟しているといった一般論的な見解のもと画一的な進路指導を行っているのではないだろうか。もし、商業高校生の進路成熟が普通高校生に比べて低く、将来の進路に対して、何をすべきか路頭に迷っている状態になっているのであれば、商業教育に関わる教員は真摯な姿勢で商業教育のあるべき姿や進路指導の方向性を検証し、改善しなければならない。

本研究において、CAMI理論を中心に「生きる力」と進路成熟態度との関係および両尺度による商業高校と普通高校との比較を行う。また、職業教育が施されている商業高校の目標達成への原因帰属がどのように変化し、進路意思決定上の「困難さ」に影響を与えているのかを研究する。このことは、商業高校生のみならず、普通高校生を含めたキャリア教育や職業教育のあり方、進路指導の方策の手がかりとして意義のある研究だと考えられる。

よって、本研究では、以下の目的で検証を進めていく。

普通高校生との比較から商業高校生の「生きる力」の現状把握および進路成熟と目標達成への原因帰属との関連から手段目的関係の自己理解が進路発達を規定することを明らかにする。

11. 研究計画

3つのCAMI測定尺度と進路成熟態度との関係および体験的な進路学習活動と進路成熟態度の学校間比較

[目的] 普通科高校生との比較から商業高校生の進路成熟態度を分析し、「努力」や「行動」

の役割の理解や意識の違いを学習，対人関係，進路の3つのCAMI理論を中心に明らかにする。さらに進路成熟態度と目標達成への原因帰属がどのような関係があるのかを検討する。また，インターンシップに代表される体験的な進路学習活動が進路成熟態度にどのような影響を与えるのかを分析する。

II. 方法

1. 調査対象者

沖縄県那覇市内の比較的進学率の高い普通高校と商業高校の2学年に調査を実施した(Table 1)。

今回の研究で一部の分析項目で未記入があっても，分析対象としているため，分析結果において，人数が異なる場合がある。

Table 1. 被調査の学校別・性別内訳

	男子	女子	計
普通高校	44	57	101
専門高校	31	71	102
計	75	128	203

2. 調査尺度

2.1 CAMI測定尺度

学習，対人関係，進路の3種類のCAMI測定尺度 全60項目 4件法（統制感4項目，手段の保有感16項目の計20項目）×3種類＝60項目）

2.2 進路成熟態度尺度 (CMAS-4)

教育的進路成熟態度尺度・職業的進路成熟態度尺度 全30項目 3件法

2.3 学校での進路体験的な学習活動

「キャリア教育・商業教育の在り方について」（全国商業高等学校長会，2011）に記載されているアンケート項目を普通高校生も回答できるように修正を加え実施した。4件法（統制感4項目，手段の保有感16項目の計20項目）×3種類＝60項目）

3.2 進路未決断尺度 (CDDQ-R) 全40項目 6件法

3.3 基礎力診断テスト (Benesse, 2012)

3.4 進路意識チェック (Benesse, 2012)

「希望職業に向けた取り組み，自宅学習のしかた」

4. 調査期日

調査は，2012年2月に行った。

5. 統計処理

本調査のデータを統計処理，データ解析する際に，「SPSS for Windows」リリース11.5.2.1J (4 Apr 2003) スタンダードバージョンを利用する。

III. 結果と考察

1. CAMI測定尺度の因子分析

高校生の目標達成への原因帰属の因子構造を分析するために学習，対人関係，進路の3つのCAMI測定尺度をそれぞれで因子分析を行った。

1.1 学習CAMIの因子分析

学習CAMIの20項目について最小2乗法による因子分析を行った。解釈可能性を考慮して，4因子解が適当であると判断した。そこで再度，最小2乗法により4因子を抽出し，プロマックス回転を行った。項目の選択は，解釈可能性と因子負荷量がいずれかの因子に.35以上であるという基準により行った。その結果，最終的には，18項目が残った（因子分析結果はTable 2）。4因子による累積説明率は47.84%であった。

第1因子は，「20：学[A E] もっと成績が良くなると思ったら，私がかんばったときだ」「12：[学A E] 授業中先生の話をよく聞けば，もっと成績が良くなる」「14：[学A E] こつこつ勉強を続けられれば，いつかテストでもっと良い点がとれる」といった項目に高い負荷を示している。努力すれば勉強ができるという「努力の保有感」の因子である。

第2因子は，「15：[学AL] 運がよくなって学校の成績がよくなる」「17：[学AL] もっと運が良くなると，もっと良い成績がとれる」「9：[学AL] テストの時，運がよくなって良い点がとれるようになる」といった項目から，自分の成績は運に左右されるという認識から「運の保有感」の因子である。

第3因子は，「5：[学C] テストで間違えを

減らそうと決めたら、確実に間違わない」「16：[学C] 学校の勉強が今よりもたくさん理解できるようになる」「13：[学AA] 学校の成績が伸びていく力が十分に備わっている」といった項目に高い負荷を示している。私は能力があるから勉強ができるという自信から「達成への統制感と能力の保有感」の因子である。

第4因子は、「3：[学AP] 先生が説明してくれると、もっと勉強ができるようになる」「10：[学AP] 先生の助言があれば、もっと良い成績がとれる」「11：[学AP] 先生と親しくなれば、もっと勉強ができるようになる」といった項目から「教師の援助の保有感」の因子である。

全体的に見て、第1因子に「努力の保有感」が登場した。成績向上は、努力の結果だと認識している。第2因子は「運の保有感」、第3因子に「達成への統制感と能力の保有感」、第4因子に「教師の援助の保有感」と続いている。千葉(2009)の中学生の学習CAMIの因子分析の結果では、第1

因子に「運・能力の保有感」、第2因子に「努力の保有感」と続いていた。高校生は、勉強ができる、できないといった原因を「努力」が必要だと理解するようになってきているが、中学生の分析結果に表れた「運の保有感」も根強い。また、学習への統制感には、能力と運の要因が含まれていることから、統制不可能な要因も未だに残っているといえる。

1.2 対人関係CAMIの因子分析

対人関係CAMI尺度20項目について因子分析(最小2乗法・プロマックス回転)を行った。3つの観点(固有値の推移、解釈可能性、因子負荷量.35以上)から因子数の決定や項目の選択を行った結果、4因子解(18項目)が適当であると判断した(因子分析結果はTable 3)。4因子による累積説明率は59.23%であった。

第1因子は、「39：[対AP] 友達がたくさんできたのは、周りの人のおかげだ」「30：[対AP] 新しい友達と仲良くなれたのは、周りの人のおかげだ」

Table 2. 学習CAMI因子分析結果(プロマックス回転後の因子負荷量)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4
F 1 : 「(学) 因子 1 : 努力の保有感」 ($\alpha = 0.869$)				
20 : [学AE] もっと成績が良くなるとしたら、私がかんばったときだ	.754	.005	-.008	-.117
12 : [学AE] 授業中、先生の話をよく聞けば、もっと成績が良くなる	.712	-.070	-.076	.288
14 : [学AE] こつこつ勉強を続ければ、いつかテストでもっと良い点がとれる	.687	.054	-.051	-.059
18 : [学AP] 勉強がわからない時、先生に質問すればちゃんとわかるようになる	.632	.078	.041	.004
8 : [学AE] 先生の話に注意して聞けば、今より勉強がわかるようになる	.547	-.197	-.007	.324
F 2 : 「(学) 因子 2 : 運の保有感」 ($\alpha = 0.838$)				
15 : [学AL] 運がよくなって学校の成績がよくなる	-.022	.939	-.086	-.021
17 : [学AL] もっと運が良くなると、もっと良い成績がとれる	.056	.804	-.184	.102
9 : [学AL] テストの時、運がよくなって良い点がとれるようになる	-.057	.646	.086	.012
F 3 : 「(学) 因子 3 : 達成への統制感と能力の保有感」 ($\alpha = 0.763$)				
5 : [学C] テストで間違いを減らそうと決めたら、確実に間違わない	-.178	-.101	.621	.181
16 : [学C] 学校の勉強が今よりもたくさん理解できるようになる	.227	.054	.614	-.200
13 : [学AA] 学校の成績が伸びていく力が十分に備わっている	.162	-.104	.603	-.049
2 : [学AA] 成績が良くなるとしたら、もともと能力があるからだ	-.182	.204	.529	.181
7 : [学C] 今より悪い点をとらないと決めたら、絶対にとらない	-.029	-.171	.509	.128
19 : [学C] もっとやる気になって、今より難しい勉強でもわかるようになる	.340	.098	.474	-.202
1 : [学AL] 今後、テストでは予想が良く当たり、良い点をとることが多くなる	-.087	.121	.430	.193
F 4 : 「(学) 因子 4 : 教師の援助の保有感」 ($\alpha = 0.760$)				
3 : [学AP] 先生が説明してくれると、もっと勉強ができるようになる	-.033	.022	.097	.700
10 : [学AP] 先生の助言があれば、もっと良い成績がとれる	.220	.257	.000	.503
11 : [学AP] 先生と親しくなれば、もっと勉強ができるようになる	.046	.217	.231	.364
因子間相関	F 1	F 2	F 3	F 4
F 2	.09			
F 3	.46	.34		
F 4	.18	.43	.21	

げだ」34：[対AP]みんなとうまく係り活動ができたのは、周りの人のおかげだ」の項目に高い負荷を示している「他者の援助の保有感」の因子である。

第2因子は、「26：[対AL]たくさん友達ができたのは、運がいいからだ」36：[対AL]新しい友達と仲良くなれたのは、運が良かったからだ」29：[対AL]みんなとうまく係り活動ができたのは、運がいいからだ」の項目に高い負荷を示している「運の保有感」の因子である。

第3因子は、「40：[対C]その気になれば、新しい友達と仲良くすることができる」32：[対C]その気になれば、たくさんの友達ができる」28：[対AA]新しい友達とすぐ仲良くなれる性格だ」の項目に高い負荷を示している「達成の統制感と能力の保有感」の因子である。

第4因子は、「21：[対AA]たくさん友達ができたのは、私の性格がいいからだ」37：[対AA]友達に好かれたのは、思いやりのある性格だからだ」38：[対AE]友達に好かれたのは、

そうなるよう努力したからだ」の項目に高い負荷を示している。友人とうまくできるのは自分の性格とそうなるように努力することもできるということから「適性の保有感」と命名した。

全体的にみて「他者の援助の保有感」が第1因子に現れたことから、高校は多方面の地域からの入学者が多く、友人からの紹介で新しく知り合うことも多くなるためか、対人関係を回りの人のおかげと考えている。しかし、第2因子が「運の保有感」であることから、友人関係がうまくいくかどうかは、運次第といった統制不可能な「運」に左右されると考える傾向がある。千葉(2009)の中学生における対人関係CAMIの因子分析結果では、第1因子に「達成への統制感」、第5因子に「努力の保有感」となっており、中学生は「その気になればうまくできる」といった考えに左右されていたが、高校生では、第3因子に能力や努力をとまなう「達成への統制感」が表れていることから、多くの他者との関わりから、対人関係能力を育ん

Table 3. 対人関係 CAMI 因子分析結果 (プロマックス回転後の因子負荷量)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4
F 1 : 「(対) 因子 1 : 他者の保有感」 ($\alpha = 0.896$)				
39 : [対AP] 友達がたくさんできたのは、周りの人のおかげだ	.889	.047	-.059	.001
30 : [対AP] 新しい友達と仲良くなれたのは、周りの人のおかげだ	.871	.036	-.134	.025
34 : [対AP] みんなとうまく係り活動ができたのは、周りの人のおかげだ	.842	-.008	.019	.032
23 : [対AP] 友達に好かれたのは、周りの人のおかげだ	.721	.047	.094	-.079
F 2 : 「(対) 因子 2 : 運の保有感」 ($\alpha = 0.849$)				
26 : [対AL] たくさん友達ができたのは、運がいいからだ	.079	.853	-.020	-.058
36 : [対AL] 新しい友達と仲良くなれたのは、運が良かったからだ	.072	.782	-.123	.037
29 : [対AL] みんなとうまく係り活動ができたのは、運がいいからだ	.051	.741	.069	-.055
24 : [対AL] 友達に好かれているのは、運がいいからだ	-.078	.703	.083	.022
F 3 : 「(対) 因子 3 : 達成への統制感と能力の保有感」 ($\alpha = 0.829$)				
40 : [対C] その気になれば、新しい友達と仲良くすることができる	-.017	-.024	.896	-.057
32 : [対C] その気になれば、たくさんの友達が作れる	-.145	.040	.824	.026
28 : [対AA] 新しい友達とすぐ仲良くなれる性格だ	-.045	.019	.697	-.018
35 : [対C] みんなとうまく係り活動をする事ができる	.314	.033	.511	.021
33 : [対AE] 新しい友達と仲良くなれるよう努力することができる	.377	-.118	.445	.081
F 4 : 「(対) 因子 4 : 適性の保有感」 ($\alpha = 0.814$)				
21 : [対AA] たくさん友達ができたのは、私の性格がいいからだ	-.079	-.045	-.072	.813
37 : [対AA] 友達に好かれたのは、思いやりのある性格だからだ	-.071	-.057	.052	.768
38 : [対AE] 友達に好かれたのは、そうなるよう努力したからだ	.186	-.031	-.062	.700
31 : [対AA] みんなとうまく係り活動ができたのは、性格がいいからだ	-.206	.277	.106	.623
27 : [対AE] 友達がたくさんできたのは、そのための努力をしたからだ	.250	-.068	.016	.514
因子間相関	F 1	F 2	F 3	F 4
F 2	.03			
F 3	.26	.02		
F 4	.18	.29	.51	

でいる段階だと考えられる。

1.3 進路 CAMI の因子分析

進路 CAMI 尺度20項目について因子分析(最小2乗法・プロマックス回転)を行った。3つの観点(固有値の推移, 解釈可能性, 因子負荷量.35以上)から因子数の決定や項目の選択を行った結果, 4因子解(18項目)が適当であると判断した(因子分析結果はTable 4)。4因子による累積説明率は53.25%であった。

第1因子は、「60:[進AA] 将来, 希望する職業につくための能力や才能がある」「50:[進AA] 希望通りの社会生活を送っていきける能力や資質がある」「59:[進AA] 希望の進路先へ進むことができる能力がある」「42:[進AA] 進路先で良い成績がとれる能力がある」「58:[進C] 将来, 自分の予想通りの社会生活を送ることができる」「47:[進C] 将来, 希望する職業に就けると

思う」の項目に高い負荷を示している。能力の保有感と達成への統制感が含まれているが, 達成への統制感の項目内容が職業に関するものであるため、「達成(就職)への統制感と能力の保有感」と命名した。

第2因子は、「53:[進AP] 希望の進路先に進めるのは, 周りの人々の良きアドバイスがあるからだ」「48:[進AP] 将来, 希望通り就職できるのは, 良きアドバイスをしてくれる人がいるからだ」「51:[進AP] 勉強ができるように助言や励ましてくれる人がいる」の項目に高い負荷を示している「他者の援助の保有感」の因子である。

第3因子は、「45:[進AE] 希望の進路先に進めるように, 計画を立てて勉強している」「49:[進AE] 希望する進路先に進むために一生懸命努力して勉強している」「44:[進C] 自分の進路に必要なレベルまで成績を良くしている」「52:[進C] だいたい希望する進路先に進むことができる」

Table 4. 進路 CAMI 因子分析結果 (プロマックス回転後の因子負荷量)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4
F 1 : 「(進) 因子 1 : 達成 (就職) への統制感と能力の保有感」 ($\alpha = 0.880$)				
60:[進AA] 将来, 希望する職業につくための能力や才能がある	.958	-.013	-.195	.058
50:[進AA] 希望通りの社会生活を送っていきける能力や資質がある	.902	.037	-.128	-.094
59:[進AA] 希望の進路先へ進むことができる能力がある	.879	-.029	-.070	.004
42:[進AA] 進路先で良い成績がとれる能力がある	.593	-.071	.054	.015
58:[進C] 将来, 自分の予想通りの社会生活を送ることができる	.591	.028	.255	-.007
47:[進C] 将来, 希望する職業に就けると思う	.416	.073	.370	-.057
F 2 : 「(進) 因子 2 : 他者の援助の保有感」 ($\alpha = 0.765$)				
53:[進AP] 希望の進路先に進めるのは, 周りの人々の良きアドバイスがあるからだ	-.028	.905	-.114	.036
48:[進AP] 将来, 希望通り就職できるのは, 良きアドバイスをしてくれる人がいるからだ	-.064	.706	-.062	.000
51:[進AP] 勉強ができるように助言や励ましてくれる人がいる	.005	.570	.108	-.045
43:[進AP] 将来, 希望通りの社会生活を送れるように周りの人が支えてくれる	.051	.505	.098	.096
55:[進AE] 希望する職業のことを, いろいろ自分で調べたり, 人に聞いている	.185	.380	.230	-.032
F 3 : 「(進) 因子 3 : 達成 (進学) への統制感と努力の保有感」 ($\alpha = 0.735$)				
45:[進AE] 希望の進路先に進めるように, 計画を立てて勉強している	-.074	-.079	.794	-.057
49:[進AE] 希望する進路先に進むために一生懸命努力して勉強している	-.145	.065	.765	-.066
44:[進C] 自分の進路に必要なレベルまで成績を良くしている	-.024	-.001	.552	.094
52:[進C] だいたい希望する進路先に進むことができる	.320	.028	.423	.008
F 4 : 「(進) 因子 4 : 運の保有感」 ($\alpha = 0.769$)				
54:[進AL] 希望通りの進路先へ進むことができたのは, 運がいいからだ	-.117	.102	-.027	.852
56:[進AL] いつもより良い成績をとれたなら, 運がよかったからだ	.041	-.001	-.124	.801
57:[進AL] 私は運良く, 希望通りの職業につけると思う	.157	-.141	.302	.532
因子間相関	F 1	F 2	F 3	F 4
F 2	.32			
F 3	.61	.35		
F 4	.28	.02	.13	

の項目に高い負荷を示している。努力の保有感と達成への統制感が含まれているが、達成への統制感の項目内用が進学に関する判断されるため「達成(進学)の統制感と努力の保有感」と命名した。

第4因子は、「54:[進AL]希望通りの進路先へ進むことができたのは、運がいいからだ」「56:[進AL]いつもより良い成績をとれたなら、運が良かったからだ」「57:[進AL]私は運良く、希望通りの職業につけると思う」の項目から「運の保有感」の因子である。

進路CAMIの因子分析において、特筆すべき点があった。第1因子の「達成(就職)への統制感と能力の保有感」と第3因子の「達成(進学)への統制感と努力の保有感」である。高校生は、就職に関しては、統制不可能な自らの能力によって支えられていると考えているが、進学に関しては、自らの努力が希望する学校への進学に必要なだと考えている。また、第2因子の「他者の援助の保有感」から、進路実現には周りの人の良きアドバイスや援助が必要だと認識しているといえる。千葉(2009)では、中学生は希望進路の実現に関しての

統制感、運や能力を含んでいたが、高校生の因子分析では、「運の保有感」は独立して第4因子に登場している。

1.4 2次的因子分析(CAMI-Total)

Table 5は、学習CAMIの因子4項目、対人関係CAMIの因子4項目、進路CAMIの因子4項目の計12項目について2次的に因子分析(最小2乗法、プロマックス回転)を行った結果である。解釈可能性を考慮して3因子解が適当であると判断し、再度、最小2乗法により3因子を抽出し、プロマックス回転を行った。項目の選択は、解釈可能性と因子負荷量がいずれかの因子に.35以上であるという基準により行った。項目の内容をもとに、第1因子を「(共)因子1:達成への統制感と能力の保有感」、第2因子を「(共)因子2:運の保有感」、第3因子を「(共)因子3:努力・他者の援助の保有感」の因子と命名した。

この分析結果から、高校生の3つの傾向を捉えることができる。まず、第1因子の「自らの能力を高く評価し、そのことが自信につながって

Table 5. 学習・対人関係・進路の3CAMI因子得点の2次的因子分析結果
(プロマックス回転後の因子負荷量)

項目	F 1	F 2	F 3	
F 1 : 「(共) 因子 1 : 達成への統制感と能力の保有感」 ($\alpha = 0.782$)				
進 : 因子 1 : 達成への統制感と能力の保有感	.740	.064	.061	
対 : 因子 3 : 達成への統制感	.738	-.119	-.017	
進 : 因子 3 : 達成への統制感と努力の保有感	.667	-.037	.072	
対 : 因子 4 : 適性の保有感	.537	.219	-.016	
F 2 : 「(共) 因子 2 : 運の保有感」 ($\alpha = 0.749$)				
学 : 因子 2 : 運の保有感	-.029	.781	.081	
進 : 因子 4 : 運の保有感	.124	.703	-.204	
対 : 因子 2 : 運の保有感	.066	.605	-.169	
学 : 因子 4 : 教師の援助の保有感	-.185	.571	.253	
F 3 : 「(共) 因子 3 : 努力・他者の援助の保有感」 ($\alpha = 0.717$)				
学 : 因子 1 : 努力の保有感	-.159	.034	.971	
進 : 因子 2 : 他者の援助の保有感	.341	-.158	.490	
学 : 因子 3 : 達成への統制感と能力の保有感	.305	.175	.468	
対 : 因子 1 : 他者の援助の保有感	.150	-.107	.329	
	因子間相関	F 1	F 2	F 3
	F 2	.35		
	F 3	.36	.13	

る傾向」と第2因子の「周りの環境に依存的な傾向」、第3因子の「他者からの応援があるからこそ、自分を律して努力する傾向」である。この結果は、千葉(2009)の中学生の原因帰属と比較して、質的な変化は見られない。

2. CAMI-Totalの学校間比較

次に商業高校生と普通科高校生とでは、目標達成への原因帰属の捉え方に差があるのかを分析するために、CAMI-Totalの平均値を学校別に比較した(分析結果はTable 6を参照のこと)。

第1因子の「(共)：因子1：達成への統制感と能力の保有感」では、有意な差は見られなかった。5%水準で「運の保有感」は、商業高校生の得点が高く、「努力・他者の援助の保有感」では普通高校生の得点が高い結果となった。

この分析結果から、商業高校生は物事の成否を運しだいと考え、自らの努力や周りの人達の援助が必要であるといった認識が乏しいことが明らかになった。つまり、千葉(2009)の研究を踏まえ

れば、商業高校生の方が「生きる力」が普通科高校生よりも低いことが推測される。生きる力が低いということは、両校のキャリア発達の差に関係しているのだろうか。

3. 進路成熟態度尺度(CAMS-4)

商業高校生と普通科高校生のキャリア発達の様子を検討するため、坂柳ら(1986)の進路成熟態度尺度(CMAS-4)を用いて分析を行った。進路成熟態度尺度の質問構成はTable 7となっている。採点方法は坂柳らの意向を踏まえ、「黙従傾向などの混入を避けるため、両方にキィを設定した上でスコアのキィに一致したものには「2点」、一致しないものには「0点」、中立的なものには「1点」とした(坂柳ら, 1986)。

Table 8は、CAMS-4尺度の教育的進路成熟(ECM)と職業的進路成熟(OCM)の各得点の平均値と標準偏差を、学校別で示したものである。学校間の比較では、職業的進路計画度以外の項目で普通高校生の得点が高い結果が表れた。

Table 6. CAMI-Totalの学校間比較(t検定)

項目	学校種別	N	平均値	SD	t値	有意確率
(共) 因子1：達成への統制感と能力の保有感	専門高校	98	-.007	.938	.104	n.s.
	普通高校	95	.007	.882		
(共) 因子2：運の保有感	専門高校	98	.149	.858	-2.373	*
	普通高校	95	-.154	.920		
(共) 因子3：努力、他者の援助の保有感	専門高校	98	-.141	1.048	2.117	*
	普通高校	95	.145	.812		

Table 7. 進路成熟態度尺度(CMAS-4)の構成(坂柳, 1996)

側面	教育的進路成熟：ECM (Educational Career Maturity)	職業的進路成熟：OCM (Occupational Career Maturity)
進路自律度：CA (Career Autonomy)	教育的進路自律度：ECA (Educational Career Autonomy)	職業的進路自律度：OCA (Occupational Career Autonomy)
	1,4,7,10,13 (計5項目)	1,4,7,10,13 (計5項目)
進路計画度：CP (Career Planning)	教育的進路計画度：ECP (Educational Career Planning)	職業的進路計画度：OCP (Occupational Career Planning)
	2,5,8,11,14 (計5項目)	2,5,8,11,14 (計5項目)
進路関心度：CC (Career Concern)	教育的進路関心度：ECC (Educational Career Concern)	職業的進路関心度：OCC (Occupational Career Concern)
	3,6,9,12,15 (計5項目)	3,6,9,12,15 (計5項目)

Table 9は、学校別に男子のみで比較した結果である。教育的進路計画度、職業的進路自律度、職業的進路計画度、職業的進路関心度に有意な差が見られ、普通高校男子の得点が有意に高い。

Table 10は、学校別に女子のみで比較した結果である。

学校別女子の比較では、教育的進路関心度、職業的進路関心度に有意な差が見られ、普通高校女子の得点が高い。

本研究で対象とした普通科高校は比較的進学率の高い高校であるため、大学進学に対する進路指導が充実していると思われる。そのため、進学に関する教育的進路成熟に関しては、普通科高校の

得点が高く、商業高校ではキャリア教育の範疇である職業教育が行われているため、職業的進路成熟は高いと予想したが、分析の結果から商業高校に比べて、普通高校の方が進学に関する教育的進路成熟態度も職業に関する職業的進路成熟態度も発達していることが確認できた。特に商業高校の男子は、将来の職業の見通しを持たないまま学校生活を過ごしていることがうかがえる。ちなみに性差による進路成熟態度得点の比較では、普通高校生での有意な差は認められず (Table 11を参照のこと)、商業高校生において職業的進路計画度でのみ有意な差が認められ、女子の得点が高いことが明らかとなった (Table 12を参照のこと)。

Table 8. 進路成熟態度 (CAMI-4) 各得点の平均値の学校別での比較

	学校別	N	平均値	標準偏差	t 値	確 率
教育的進路自律度	専 門	101	6.73	1.70	2.02	*
	普 通	100	7.21	1.64		
教育的進路計画度	専 門	101	5.62	2.49	2.61	**
	普 通	100	6.48	2.15		
教育的進路関心度	専 門	101	7.73	2.04	2.75	**
	普 通	100	8.41	1.39		
職業的進路自律度	専 門	102	6.89	1.82	2.80	**
	普 通	100	7.61	1.82		
職業的進路計画度	専 門	102	5.46	2.46	1.59	n.s.
	普 通	100	6.04	2.71		
職業的進路関心度	専 門	102	7.62	1.94	2.97	**
	普 通	100	8.39	1.75		

注) ***p<.01, **p<.05

Table 9. 進路成熟態度 (CAMI-4) 学校別 (男子) での比較

	学校別	N	平均値	標準偏差	t 値	確 率
教育的進路自律度	専 門	30	6.77	1.81	1.39	n.s.
	普 通	43	7.35	1.72		
教育的進路計画度	専 門	30	4.97	2.40	2.54	*
	普 通	43	6.44	2.46		
教育的進路関心度	専 門	30	7.67	1.71	1.37	n.s.
	普 通	43	8.19	1.52		
職業的進路自律度	専 門	31	6.52	1.71	2.50	*
	普 通	43	7.63	2.00		
職業的進路計画度	専 門	31	4.68	2.41	2.23	*
	普 通	43	6.12	3.13		
職業的進路関心度	専 門	31	7.10	2.06	2.33	*
	普 通	43	8.21	2.01		

注) ***p<.01, **p<.05

Table 10. 進路成熟態度 (CAMS-4) 学校別 (女子) での比較

	学校別	N	平均値	標準偏差	t 値	確 率
教育的進路自律度	専 門	71	6.72	1.67	1.33	n.s.
	普 通	57	7.11	1.59		
教育的進路計画度	専 門	71	5.90	2.49	1.56	n.s.
	普 通	57	6.51	1.91		
教育的進路関心度	専 門	71	7.76	2.18	2.51	*
	普 通	57	8.58	1.27		
職業的進路自律度	専 門	71	7.06	1.86	1.70	n.s.
	普 通	57	7.60	1.69		
職業的進路計画度	専 門	71	5.80	2.42	0.42	n.s.
	普 通	57	5.98	2.36		
職業的進路関心度	専 門	71	7.85	1.86	2.23	*
	普 通	57	8.53	1.52		

注) ****p<.01, ***p<.05

Table 11. 進路成熟態度 (CAMS-4) 普通高校性差での比較

	性 別	N	平均値	標準偏差	t 値	確 率
教育的進路自律度	男 子	43	7.35	1.72	0.73	n.s.
	女 子	57	7.11	1.59		
教育的進路計画度	男 子	43	6.44	2.46	-0.15	n.s.
	女 子	57	6.51	1.91		
教育的進路関心度	男 子	43	8.19	1.52	-1.41	n.s.
	女 子	57	8.58	1.27		
職業的進路自律度	男 子	43	7.63	2.00	0.09	n.s.
	女 子	57	7.60	1.69		
職業的進路計画度	男 子	43	6.12	3.13	0.23	n.s.
	女 子	57	5.98	2.36		
職業的進路関心度	男 子	43	8.21	2.01	-0.90	n.s.
	女 子	57	8.53	1.52		

注) ****p<.01, ***p<.05

Table 12. 進路成熟態度 (CAMS-4) 商業高校性差での比較

	性 別	N	平均値	標準偏差	t 値	確 率
教育的進路自律度	男 子	30	6.77	1.81	0.13	n.s.
	女 子	71	6.72	1.67		
教育的進路計画度	男 子	30	4.97	2.40	-1.74	n.s.
	女 子	71	5.90	2.49		
教育的進路関心度	男 子	30	7.67	1.71	-0.21	n.s.
	女 子	71	7.76	2.18		
職業的進路自律度	男 子	31	6.52	1.71	-1.38	n.s.
	女 子	71	7.06	1.86		
職業的進路計画度	男 子	31	4.68	2.41	-2.16	*
	女 子	71	5.80	2.42		
職業的進路関心度	男 子	31	7.10	2.06	-1.81	n.s.
	女 子	71	7.85	1.86		

注) ****p<.01, ***p<.05

4. CAMI-Total と進路成熟態度との関連

Table 13は、2 次因子分析で抽出された3 つの共通因子と進路成熟態度の相関を分析した結果である。

「(共) 因子 1 : 達成への統制感と能力の保有感」は、進路成熟態度の全ての項目と 5 %水準での相関関係が見られた。「(共) 因子 2 : 運の保有感」は、教育的進路自律度、職業的進路自律度、計画度と負の相関が見られる。「(共) 因子 3 : 努力・他者の援助の保有感」では、共通因子 1 と同様に進路成熟態度の全ての項目と 5 %水準で正の相関が見られた。

先行研究では、「生きる力」は、「運の保有感」との関連は浅く、「達成への統制感」「能力の保有感」「努力の保有感」「他者の援助の保有感」との関連が深いことが明らかになっており、進路成熟態度とも同様な結果だった。「達成への統制感と能力の保有感」では、すべての項目において、正の相関が確認できた。中学生の分析結果では、「能力」で説明する考えは進路成熟にマイナスの影響を与えていたが、高校生では、「自分は能力があるからなんとかなる」との認識は、進路成熟にプラスの影響を与えていた。次に「運の保有感」では、目標達成を「運」で説明する考えは進路成熟にマイナスの影響を与えており、教育的自律度、職業的自律度、関心度に負の相関が確認できた。最後に「努力・他者の援助の保有感」を見ると、すべての項目に正の相関が確認できた。では、「能力」に支えられた進路成熟と「努力と他者の援助」に支えられた進路成熟はどちらがキャ

リア教育で推奨されるべき進路成熟なのだろうか。

「努力」や「他者の援助」が結びついていない自らの「能力」に起因する進路成熟は、生徒本人が自分の意志でコントロールできるものではない。コントロールできるのは、自らの「行動」すなわち、「努力」だと考えられるからである。物事の成否の結果を自ら統制不可能なものにゆだねてしまうと自らの行動の結果に結び付けて考えることができない。自分の行動が問題ではなくなってしまうからである。また、「他者の援助」と結びついていないということは、「生きる力」のいう「豊かな人間性」が育まれておらず、独力で生きようとする「閉鎖的な個人」(高橋, 2007)に陥ってしまう。島袋(1996)は、児童・生徒が「自律的・主体的」であるということは、進路選択場面や学習場面において、自分の行動と結果のつながりを理解し、学習や進路における「見通し」を持つことを意味すると述べている。我々がキャリア教育を推進する上で考えていかなければ他者の援助を認識させ、努力によって道は開かれることを十分に理解させる必要があるだろう。

5. 体験的な進路学習活動の価値観の比較

これまでの研究から、手段目的関係の自己理解がキャリア発達を規定しており、普通科高校生の方がキャリア発達していることが明らかになったが、この原因帰属の違いは、インターンシップに代表される体験的な進路学習活動とキャリア発達に及ぼす影響にも違いがあることが伺える。そこで、高校生がこのような進路学習をどの程度、

Table 13. CAMI-Total 因子得点と CAMS-4 各平均値の相関

項 目		教育的進路			職業的進路		
		自律度	計画度	関心度	自律度	計画度	関心度
(共) 因子 1 : 達成への統制感と能力の保有感	Pearson の相関係数	.330**	.315**	.144*	.188*	.348**	.163*
	有意確率 (両側)	.000	.000	.046	.009	.000	.023
	N	192	192	192	193	193	193
(共) 因子 2 : 運の保有感	Pearson の相関係数	-.193*	-.128	-.110	-.177*	-.189*	-.087
	有意確率 (両側)	.007	.077	.128	.014	.008	.230
	N	192	192	192	193	193	193
(共) 因子 3 : 努力, 他者の援助の保有感	Pearson の相関係数	.204*	.172*	.315**	.226*	.190*	.271**
	有意確率 (両側)	.005	.017	.000	.002	.008	.000
	N	192	192	192	193	193	193

** 相関係数は 1 %水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5 %水準で有意 (両側) です。

自分の進路に有用と考えているのかについて分析した(検定結果はTable14を参照のこと)。質問項目については、「キャリア教育・商業教育の在り方について」(全国商業高等学校長会, 2011)に記載されているアンケート項目を普通高校生も回答できるように修正を加え実施した。教示は「中学校・高校での進路指導や身近な体験学習は、あなたの進路決定にどれくらい影響を与えましたか」とし、「1. 全く役にたっていない」から「4. かなり役にたった」の4件法にて回答を求めた。

「学校の先生による講話・講演」の項目において5%水準で有意に得点が高く、一方、普通高校生は、「(5)上級学校の体験入学」「(11)学校で学んだ教科の項目」において1%水準で有意に得点が高かった。上記の結果から、商業高校生では、就

職や職業を意識した専修学校への進学志向のため職業に関する体験的な学習活動に関心が高く、一方、普通高校生では、大学進学志向の生徒が多いため、進学に関する学習活動に関心が高く、学校で学んだ教科が進路決定に有用だと考えている。普通高校生と商業高校生では、進路選択の違いから、「体験的な進路学習活動」の受け止め方に違いがあるようだ。

6. 体験的な進路学習活動と進路成熟態度との関係
次に商業高校生と普通科高校生では、体験的な学習活動の価値観に違いがあり、体験的な学習活動と進路成熟態度(CAMS-4)の相関も異なることが予想されるため、学校別に分析した。Table 15は普通高校生における分析結果である。

Table 14. 体験的な学習活動平均値の学校別による比較 (t 検定)

項目	学校種別	平均値	SD	t 値	確 率
(1) 身近な産業や職業についての調査	専 門	2.75	0.54	0.68	n.s.
	普 通	2.68	0.75		
(2) 企業見学や職場見学	専 門	3.01	0.68	2.35	*
	普 通	2.76	0.81		
(3) 職場体験・インターンシップ	専 門	3.24	0.73	0.69	n.s.
	普 通	3.16	0.85		
(4) 上級学校の見学や調査	専 門	2.95	0.76	-1.78	n.s.
	普 通	3.14	0.75		
(5) 上級学校の体験入学	専 門	2.92	0.80	-2.79	**
	普 通	3.25	0.86		
(6) 社会人や職業人の講話・講演	専 門	3.25	0.77	2.50	*
	普 通	2.98	0.80		
(7) 上級学校の先生による講話・講演	専 門	3.18	0.71	2.47	*
	普 通	2.93	0.71		
(8) 卒業生進路講話	専 門	3.06	0.79	0.95	n.s.
	普 通	2.95	0.83		
(9) 学校の先生の体験談	専 門	2.74	0.76	-1.60	n.s.
	普 通	2.90	0.71		
(10) 学校の進路相談	専 門	2.87	0.79	-0.82	n.s.
	普 通	2.96	0.73		
(11) 学校で学んだ教科	専 門	2.84	0.71	-4.35	**
	普 通	3.28	0.71		
(12) 周りの大人との仕事や人生についての話	専 門	2.95	0.84	-0.50	n.s.
	普 通	3.01	0.84		

注) **...p<.01, * ...p<.05

「(3)職場体験やインターンシップ」「(6)社会人や職業人の講話・講演」「(7)上級学校の先生による講話・講演」「(12)周りの大人との仕事や人生についての話」が教育的関心度、職業的関心度と「(4)上級学校の見学や調査」「(9)学校の進路相談」が教育的計画度、「(10)学校の先生の体験談」が教育的自律度、教育的関心度、「(10)学校の進路相談」が、教育的計画度と1%から5%の範囲で有意な相関が見られた。普通高校生は、教師の体験談か

ら進学に必要な情報を把握し、それとの調整をはかりながら、自分自身の行動のコントロールを行い、自らを律しながら、自己実現を図ろうとすると考えられる。

一方、商業高校生の分析結果が、Table16である。「(4)上級学校の見学や調査」「(5)上級学校の体験入学」が教育的進路計画度、教育的進路関心度、職業的進路計画度、「(6)社会人や職業人の講話・講演」では職業的進路計画度と結びついてい

Table 15. 普通高校生の体験的な進路学習活動と CAMS-4 との相関係数

項目		教育的進路			職業的進路		
		自律度	計画度	関心度	自律度	計画度	関心度
(1) 身近な産業や職業についての調査	Pearsonの相関係数	-.136	.118	.153	.059	.056	.171
	有意確率(両側)	.178	.241	.128	.562	.580	.089
	N	100	100	100	100	100	100
(2) 企業見学や職場見学	Pearsonの相関係数	.021	-.034	.147	-.020	-.060	.163
	有意確率(両側)	.833	.735	.145	.842	.554	.105
	N	100	100	100	100	100	100
(3) 職場体験・インターンシップ	Pearsonの相関係数	.064	.127	.257 *	.124	.055	.268 **
	有意確率(両側)	.524	.210	.010	.220	.589	.007
	N	100	100	100	100	100	100
(4) 上級学校の見学や調査	Pearsonの相関係数	-.055	.250 *	.065	-.170	.022	.108
	有意確率(両側)	.584	.012	.520	.090	.825	.286
	N	100	100	100	100	100	100
(5) 上級学校の体験入学	Pearsonの相関係数	-.114	.068	.119	-.100	-.086	.058
	有意確率(両側)	.259	.504	.238	.321	.395	.568
	N	100	100	100	100	100	100
(6) 社会人や職業人の講話・講演	Pearsonの相関係数	.133	.009	.250 *	.171	.117	.300 **
	有意確率(両側)	.188	.932	.012	.088	.246	.002
	N	100	100	100	100	100	100
(7) 上級学校の先生による講話・講演	Pearsonの相関係数	.037	.138	.221 *	.037	.096	.207 *
	有意確率(両側)	.715	.170	.027	.718	.342	.039
	N	100	100	100	100	100	100
(8) 卒業生進路講話	Pearsonの相関係数	.023	.030	.088	.087	.108	.069
	有意確率(両側)	.824	.764	.385	.390	.283	.495
	N	100	100	100	100	100	100
(9) 学校の先生の体験談	Pearsonの相関係数	.280 **	.088	.221 *	.115	.097	.166
	有意確率(両側)	.005	.385	.027	.254	.337	.100
	N	100	100	100	100	100	100
(10) 学校の進路相談	Pearsonの相関係数	.182	.247 *	.192	.113	.113	.175
	有意確率(両側)	.070	.013	.056	.265	.264	.081
	N	100	100	100	100	100	100
(11) 学校で学んだ教科	Pearsonの相関係数	-.054	.074	-.020	-.132	-.075	.072
	有意確率(両側)	.597	.463	.846	.190	.456	.478
	N	100	100	100	100	100	100
(12) 周りの大人との仕事や人生についての話	Pearsonの相関係数	.092	.106	.270 **	.150	.053	.263 **
	有意確率(両側)	.362	.293	.007	.135	.601	.008
	N	100	100	100	100	100	100

**相関係数は1%水準で有意(両側)です。

*相関係数は5%水準で有意(両側)です。

た。商業高校生の特徴的な傾向として、専修学校進学希望者が多いためか、上級学校関連の項目と社会人や職業人による講話・講演に集中して有意な相関が表れている。また、普通高校生では、見られなかった職業的進路成熟態度の計画性である職業的進路計画度に相関が表れた。

以上の分析結果をまとめると普通高校生は大学進学希望者が多く、学校の進路相談や教師の援助が、教育的進路自律度、教育的進路計画度、教育的進路関心度と結びつき、身近な大人との関わり

が職業的進路関心度に結びついている。一方、商業高校生では上級学校の見学や体験入学の項目に集中して相関があらわれている。残念なことに普通高校生で見られた学校の進路相談や教師の援助とった身近な大人との関わりが結びついていない。やはり、本研究で明らかになった、商業高校生の「運の保有感」が高く、「努力他者の援助の保有感」が低いという原因帰属は、キャリア教育と十分に結びついていないことが明らかになった。

Table 16. 商業高校生の体験的な進路学習活動とCAMS-4 との相関係数

項 目	教育的進路			職業的進路			
	自律度	計画度	関心度	自律度	計画度	関心度	
(1) 身近な産業や職業についての調査	Pearsonの相関係数	.174	.135	.172	.083	.164	.105
	有意確率(両側)	.082	.178	.085	.410	.100	.295
	N	101	101	101	102	102	102
(2) 企業見学や職場見学	Pearsonの相関係数	.182	.137	.145	-.095	.068	.040
	有意確率(両側)	.068	.172	.149	.344	.497	.688
	N	101	101	101	102	102	102
(3) 職場体験・インターンシップ	Pearsonの相関係数	.113	.190	.134	-.003	.153	.050
	有意確率(両側)	.259	.057	.180	.976	.125	.618
	N	101	101	101	102	102	102
(4) 上級学校の見学や調査	Pearsonの相関係数	.162	.213 *	.280 **	.081	.200 *	.178
	有意確率(両側)	.114	.037	.006	.431	.049	.080
	N	96	96	96	97	97	97
(5) 上級学校の体験入学	Pearsonの相関係数	.195	.298 **	.311 **	.003	.227 *	.132
	有意確率(両側)	.055	.003	.002	.976	.025	.195
	N	97	97	97	98	98	98
(6) 社会人や職業人の講話・講演	Pearsonの相関係数	.045	.124	.019	.013	.262 **	.013
	有意確率(両側)	.652	.216	.852	.899	.008	.897
	N	101	101	101	102	102	102
(7) 上級学校の先生による講話・講演	Pearsonの相関係数	.174	.129	.181	.092	.185	.059
	有意確率(両側)	.083	.202	.071	.362	.064	.560
	N	100	100	100	101	101	101
(8) 卒業生進路講話	Pearsonの相関係数	.029	-.012	.086	-.037	.087	-.050
	有意確率(両側)	.775	.905	.393	.715	.383	.621
	N	101	101	101	102	102	102
(9) 学校の先生の体験談	Pearsonの相関係数	.001	.025	.015	.087	.082	.052
	有意確率(両側)	.917	.805	.879	.386	.413	.605
	N	101	101	101	102	102	102
(10) 学校の進路相談	Pearsonの相関係数	-.009	.063	.153	-.037	.137	.065
	有意確率(両側)	.929	.529	.126	.712	.170	.519
	N	101	101	101	102	102	102
(11) 学校で学んだ教科	Pearsonの相関係数	-.035	.011	.019	-.066	.019	.028
	有意確率(両側)	.728	.912	.854	.508	.850	.782
	N	101	101	101	102	102	102
(12) 周りの大人との仕事や人生についての話	Pearsonの相関係数	.005	-.019	.790	-.023	-.003	.007
	有意確率(両側)	.963	.854	.430	.819	.973	.947
	N	101	101	101	102	102	102

**相関係数は1%水準で有意(両側)です。

*相関係数は5%水準で有意(両側)です。

7. 高校生のCAMI-Totalによるクラスター分析

CAMI-Totalの因子得点の差によって、両校の傾向の違いが明るみにでたが、進路指導を行う上で、高校生のタイプ別に分類する必要がある。そのため、「達成への統制感と能力の保有感」、「運の保有感」、「努力と他者の援助の保有感」の3つの変数を用いたサンプルクラスター分析を行い、高校生の生きる力についてのタイプを分析した。クラスター化の方法として、Ward法、間隔の測定法として平方ユークリッド法を用いた。クラスターの数はテンドログラム (Fig. 1) や各々のクラスターの中に含まれるサブサンプル数などを考慮して判断した。その結果、クラスターを3つにすることが妥当と判断した。第1クラスターには70

名、第2クラスターには、48名、第3クラスターには75名の調査対象が含まれた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが見られた。 $(\chi^2 = 6.415, df = 2, p < .05)$

高校生において分類された3つのクラスターの「達成への統制感と能力の保有感」、「運の保有感」、「努力・他者の援助の保有感」の平均値を示したのがTable17である。この分析結果から、各クラスターの特徴を探っていくことにしたい。

第1クラスターは、全ての項目において平均値がマイナスであり、特に「努力・他者の援助の保有感」の値が低いタイプである。このタイプは学校生活全般において、努力することの必要性や良好な人間関係を築くことができない「悲観型」タ

Table17. 高校生のCAMI-Totalによるクラスター分析

		N	平均値	S D	確率
共：因子1：達成への統制感と能力の保有感	CL1	70	-.417	0.783	***
	CL2	48	-.452	0.645	F(2,190)=52.599,p<.001
	CL3	75	.678	0.738	
共：因子2：運の保有感	CL1	70	-.190	0.599	***
	CL2	48	-.746	0.651	F(2,190)=61.981,p<.001
	CL3	75	.654	0.816	
共：因子3：努力・他者の援助の保有感	CL1	70	-.930	0.727	***
	CL2	48	.464	0.509	F(2,190)=117.080,p<.001
	CL3	75	.571	0.623	



Fig. 1 高校生タイプ分類におけるテンドログラム

タイプと命名した。第2クラスは、「達成への統制感」、「運の保有感」の値がマイナスであるが、「努力・他者の援助の保有感」の値が高いタイプとなった。この場合は、物事の成否は能力や運ではなく、自らの努力によって切り開くものだと考える「現実型」タイプと命名した。第3クラスは、第1クラスと対象的に全ての項目の値が高いタイプとなった。学校生活全般において自分には能力も運もあり、良好な人間関係も築くことができる「楽観型」タイプと命名した(Fig. 2)。

8. クラスターの学校種別による割合比較

次に各クラスターの学校種別による割合を見てみる。それによって、学校の影響について考慮することが可能になるからである。学校種別による割合を示したのが、Table 18である。「悲観型」タイプの第1クラスは商業高校生に多く、第2クラスターである「現実型」タイプでは、普通高校生

Table18. 学校別によるクラスターの割合

		悲観型	現実型	楽観型
普通高校	N	26	32	37
	学校の%	27.4	33.7	38.9
	CLの%	37.1	66.7	49.3
	調整済み残差	-2.53	2.79	0.02
専門高校	N	44	16	38
	学校の%	44.9	16.3	38.8
	CLの%	62.9	33.3	50.7
	調整済み残差	2.53	-2.79	-0.02

$\chi^2=9.931$ $df=2$ $p<.01$

に多かった。第3クラスターである「楽観型」タイプでは、有意な差は確認できなかった。

商業高校生に第1クラスターの「悲観型」タイプが多いという結果は、中学校段階における偏差値輪切りによって入学した生徒が多いことが予想されるが、商業高校の学校内過程を研究した竹内(1976)よれば、商業高校生は、学年が上がるにつれて意欲的な姿勢は次第に減少し、消極的な姿勢が増大していく傾向を明らかにしている。「試験前にだけ勉強する」とした者が学年を経ると共に増加し、「頑張って勉強しようと思った」とした者は学年を経ると共に減少した。一方、これとは別に普通科高校に行った調査では、「頑張って勉強しようと思った」者は学年と共に増加している。竹内の研究は、商業高校生の学習面における消極的な傾向を示唆しているが、高校3年間で段階的に消極的な姿勢になっていくのは、目標達成への原因帰属の変化にも要因があると考えられる。今後の研究において、商業高校生の目標達成への原因帰属の変化や研究Iで明らかになった3つのタイプが、学年を上がるにつれてどのように変化していくのかを分析していきたい。

9. 研究のまとめ

本研究から、商業高校生の進路成熟は手段-目的関係の自己理解に規定されることが確認できた。高校生では進路成熟に「能力の保有感」「他者の援助の保有感」が、進路成熟にプラスの影響を与えており、逆に物事の成否を運しだいと捉え

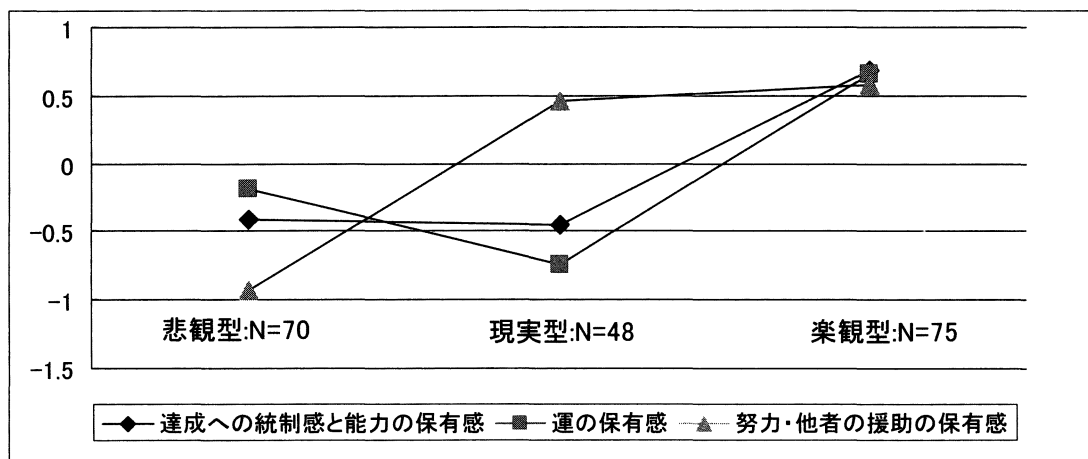


Fig. 2 高校生のタイプ別グラフ

る「運の保有感」はマイナスの影響を与えていた。その中でも商業高校生は、物事の成否を「運しだい」と捉える傾向が強く、「努力」や「他者の援助」の必要性を重視していないことが、普通科高校生との進路成熟の差の一要因だと推測された。よって、キャリア教育の範疇である職業教育が行われているにもかかわらず、商業高校生は、普通科高校生に比べて進路成熟していないことが明らかになった。キャリア教育とは、「生きる力」をはぐくむことである。本研究において、商業高校生は、普通科高校生と比べて、「生きる力」が相対的に弱いことが明らかになった。高校におけるキャリア教育は、小中学校で培われた「生きる力」を土台としてなりたつものであり、商業高校生は中学校段階までに育まれるべき「生きる力」の土台が小さいことが予想される。そのため、職業教育を行ったとしても十分な進路成熟に結びついていない。また、高校生のタイプを分類した結果、商業高校生は、物事の成否を努力次第とは考えず、良好な人間関係も築けない「悲観型」タイプが相対的に多く、物事の成否は能力や運しだいではなく、自らの努力によって切り開くものだと考える「現実型」タイプが少ないという結果となった。

商業高校に「悲観型」タイプが多いということは、商業高校への入学者は中学校段階における偏差値輪切りによって入学した生徒が多いからだとして推測されるが、商業高校の学校内課程を研究した竹内(1976)によれば、商業高校生は、学年が上がるにつれて意欲的な姿勢は次第に減少し、消極的な姿勢が増大していく傾向を明らかにしている。「試験前にだけ勉強する」とした者が学年を経ると共に増加し、「頑張って勉強しようと思った」とした者は学年を経ると共に減少した。一方、これとは別に普通科高校に行った調査では、「頑張って勉強しようと思った」者は学年と共に増加している。竹内の研究は、商業高校生の学習面における消極的な傾向を示唆しているが、高校3年間で段階的に消極的な姿勢になっていくのは、目標達成への原因帰属の変化にも要因があると考えられる。今後の研究では、商業高校に特化し、彼らの目標達成への原因帰属の変化や本研究で明らかになった高校生タイプが、学年を上がる

につれてどのように変化していくのかを分析する必要がある。

また、よりよいキャリア発達とは、「他者との人間関係を通して、職業や生きかたを学び、それを基に自らの将来を設計し、自分に適した進路を選択・決定することだと考えられる。」つまり、他者の援助を感じない商業高校生は、身近な他者からの情報を得ることができない。自分の価値観のみで将来設計を行ってしまう可能性があり、自分に適した進路が見えないため、進路未決定に陥ることが予測される。本研究で明らかになった、普通科高校生よりも「他者の援助の保有感」を感じていない商業高校生は進路決定において「困難さ」を抱える傾向が高いことが予想される。手段目的関係の自己理解が進路意思決定上の「困難さ」とどのような関係があるのかを分析していきたい。

引用文献

- Skinner, E.A., Chapman, M., Baltes, P.B. 1988 Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*. 54, 117-133
- 坂柳恒夫・竹内登規夫(1986) 進路成熟態度尺度(CAMS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 35(教育科学編), pp.169-182
- 島袋恒男・井上厚・廣瀬等(1996) 沖縄県の児童・生徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究(1) 琉球大学教育学部紀要48, pp.387-404
- 島袋恒男(2007) 高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究 琉球大学教育学部紀要70, pp.55-68
- 清水和秋・坂柳恒夫(1991) 進路選択の変化と進路不決断—中学生男子生徒3年間の縦断調査の分散分析 進路指導研究12, pp.1-10
- 高橋勝(2007) 生きる力 最新教育キーワード137第12版 時事通信社 pp.98-99
- 竹内洋(1976) 職業高校の学校内課程—X商業高校調査から—京都大学教育学部紀要33, pp.24-47
- 千葉康成・島袋恒男(2009) 中学生における「生きる力」の心理学検討1—CAMI理論を中心として— 琉球大学教育学部紀要75, pp.117-133
- 中央教育審議会(2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」
- 望月由起(2002) 「生徒のキャリア展望に対する高校の

進路指導の学校教育効果に関する一考察」 進路指導
研究 第21巻第1号, pp. 15-22

文部科学省 (2011) 学校基本調査 [卒業後の状況調査]

文部科学省 (2004) キャリア教育の推進に関する総合的
調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤
労観, 職業観を育てるために～, pp. 1

若松養亮 (2001) 大学生の進路未決定者が抱える困難さ
について－教員養成学部 of 学生を対象に－ 青年心
理学研究49 (2), pp.209-218

リクルート (2010) 高校の進学指導に関する調査
<http://souken.shingaku.net.com>

注) 本研究は第2著者の高江洲讓治の平成24年度琉球大
学大学院教育学研究科修士論文の一部に加筆・修正
と考察を加えたものである。